

ワーキング部会における協議について

ジュニアワーキング部会での主な御意見

項目	各委員からの意見等
特性・背景	食育が疎かな家庭に対して、教育機関や地域がどのように支援していったらいいかを考えなければならない。「家庭の食育を向上させるよう、多様な人材が連携する」という記述に賛成である。
	保護者と学校とのコミュニケーション強化が必要
	保護者が給食を通して食育を学ぶ機会があるといい。
	ライフステージの特性・背景について、基本目標2の「食材」についての記述が弱い。
乳幼児期	「食生活リズムの基礎をつくる」ことが、乳幼児期では最も大切
	「食を営む力」や、授乳による「精神的な安定」という言葉が分かりにくい。
学童期	「食に関する指導の手引」(文部科学省)により学校が目指している食育の目標が、網羅されている。
	食べものに関する感謝の気持ちが薄れている。学童期にも感謝する心について位置づけてほしい。
	噛み合わせでは、食べるときの「姿勢」が重要である。食事マナーの中で、姿勢について取り上げてもらいたい。
	アレルギーなど、疾患のある子どもへの配慮について記載することも必要なのではないか。
方向性	乳幼児の「調理」や学童期の「調理技能」など、もう少し、各ライフステージにふさわしい表現を。
	楽しく食育ができるような方向性があるといい。
具体的な取組	適正体重の維持については、ポピュレーションアプローチとハイリスクアプローチは別に考える必要がある。
目標指標	子どもの食べる意欲や関心、食行動の実践例の経過、共食の状況を見られないか。
	保育所の給食でも地場産品の利用品目数を出すことはできないか。

シニアワーキング部会での主な御意見

項目	各委員からの意見等
特性・背景	シニアのライフステージの特徴として、青年期は、情報を入力する時期、高齢期は出力型、壮年期はその中間という形になっていると思う。
青年期	青年期は、子育て世代でもある。家庭において子どもへの食育を行う世代であるので、子育てを担っているという内容を加えてはどうか。
方向性	青年期の「食品の安全性に関する知識」や壮年期の「無駄のない食生活」は、他のライフステージにも取り組んでほしい内容である。
	すべてのライフステージに共通して当てはまる内容については、どのような掲載方法にするかを検討してもらいたい。
	実際に親子で体験してもらうのが一番だと思う。
具体的な取組	県の取組について、複数のライフステージに同じ内容が書いてある。どのライフステージにも同じ取組があてはまるのか。
	青年期の人たちが、壮年期・高齢期の人から学ぶ機会があると、食文化が伝承され、さらに、高齢期の人々にとっては、教える楽しみを感じる場にもなる。
	食生活が健康に及ぼす影響についてなどを周知していくことが必要。特に、米を主食とした、日本型食生活の良さを知らせていかなくてはならない。
	宮城県には生産地も消費地もある。生産者と消費者の交流は、生産者にとっては生産物のPRになり、消費者にとっては商品を選ぶ知識を身につける機会になる。
	購入する場面で、地産地消が進むような働きかけがあるといい。消費することが生産に結びついていく。
目標指標	食料自給率や地産地消の日をより推進するような指標が設定できないか。